

# 医心 伝心

## 高校同級会に出席して

県医常任理事 長谷川 徹

先日、高校の32年振りの同級会に出席してきました。一学年三百数十名のうち三分の一ぐらいの同級生が集まりました。私の高校時代は3年間同じクラスで、部活動や生徒会活動には積極的ではなかったのですが、他のクラスとの交流があまりありませんでした。ところが、その席で見覚えのない（といっは大変失礼ですが）同級生から「おい、君、長谷川君だろ。僕はクラス対抗の武術大会でキミと闘ったんだよ、結果は引き分けだったんだ、覚えてないだろ、ワハハ」とか、別の同級生から「長谷川君、ボク実はね、3年の夏休みに自習室でキミから数学を教えてもらったんだ、ありがとう」などと声をかけてもらいました。私にはそんな記憶は全くありません。今でこそ母校富山高校には愛着もありますが、当時何の取柄もなく、高校を大学予備校くらいにしか思っていなかった私にとってこの同級会は、そこに確かに存在し、青春を過ごしていた（もうひとりの）自分自身に出会うかけがえのない機会となりました。

話は変わりますが、昨今、アベノミクスの影響でしょうか、将来へ向けた明るい話題が多くなったような気がします。ようやく上向きかけた経済、歯車を前へ進めようとする力強い政治家の提言、技術革新への期待、周辺諸国への毅然とした姿勢、東京オリンピック招致成功など、思わず拳を握りしめたくくなるようなニュースが聞こえてきます。一方、我々地域医療を取り巻く環境は必ずしもそうとは言いきれません。少子高齢化に伴う更なる医療費負担の懸念、TPPによる国民皆保険制度の崩壊危機、消費増税に伴う医療機関経営の逼迫、更には、論文データ改竄による臨床研究に対する信頼失墜など、厳しい視線が浴びせられ続けています。私たちはこれからの時代をどう進んでいけばよいのでしょうか。

地域医療を語る時、真っ先に思い浮かぶのは「医師不足」です。医療過誤がクローズアップされ、医療安全が叫ばれるようになり、また、研修医制度が改革され、事実上大学医局制度が崩壊して以降、若手医師（医学生）は地方や特定の診療

科に目を向けなくなりました。せつかく世の中が未来に明るい期待を抱き始めた現在、このままでは地域医療の担い手はますます高齢化し将来を悲観視せざるを得ません。「もう少し辛抱していれば売り手と買い手の市場がこなれ、若手医師もこちらに目を向けざるを得なくなるサ」と楽観視する考え方もあるでしょうが、果たして本当にそうなるのでしょうか。

看護協会は、高齢福祉社会の到来を踏まえ、自分たち看護職が医療のみならず介護の現場でももっと需要が高まると予測し、看護師の養成や家庭にうずもれた元看護師の発掘、登用に躍起になっています。私たちも、地域の実情や将来を予測し、診療科毎、地域毎にどんな医師がどのくらい必要か、内外に提示し住民や医学生を理解を得る努力をするべきではないでしょうか。

しかしそのためには、診療科間や医療機関間の垣根を越え、各医師の実務負担の平準化を目指すという、難しい課題が立ちはだかっています。また、医療には技術の伝承という側面があり、頭数だけではなく、世代がうまくかみ合った編成を必要としています。

富山県は、日本の百分の一の縮図と言われる如く、比較的全県下のアクセスがよく、コンパクトに纏まっています。先に述べた明るい話題の一つに新幹線の開通間近ということもあります。また当医師会も、男女共同参画や勤務医部会の活性化などを通じて、他県に劣らぬ取り組みを進める只中にあります。我が県が地域医療の全体を捉え、将来に亘って持続可能で、住民の一人ひとりに無駄、無理のない医療サービスを提供できるような青写真を描いたら…。実現は難しくても、一つの理想像を示すことができたなら…。

高校生の頃、漠然と富山を愛し、漠然と医師を目指していたのは良しとしても、友の視線を顧みずに過ごしていた自分に、自戒と反省を込めて、発信力、提言力を身につけて、郷土に貢献できたらいいなと思う今日この頃です。